
彼の特別

あーゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼の特別

【Nコード】

N4171Z

【作者名】

あーゆ

【あらすじ】

大学生になった新一たち。

ゼミ仲間の国本沙耶は新一に片想い。

彼女がいることを知ったが本人にも止められないくらいの嫉妬の渦に飲み込まれる。

蘭と新一はこのまま引き離されてしまうのか…？

彼女は片想い中

「なー 卵焼き頂戴♪」

「やだ」

「ほんつつとに工藤くんのお弁当っていつも見事…」

「お母さんが作ってるの？」

ゼミのグループワークのために昼休みに研究室に集まった私たちのグループは
いつの間にか話題が”工藤くんのお弁当”

「あれ？でも工藤の両親は海外にいんだろ？」

「まさか自分で！？」

黙々と、でも美味しそうに工藤くんはお弁当を食べ続ける。

みんながワイワイと”誰が作ったのか”を論議しているのを聞きながら

彼を見つめていた。

「なに考えてんのか本当にわからねーやつだなあ」

田中くんが工藤くんの頭を小突いた。

「探偵たるもの、分かりやすくてたまるかよ」

「でもお前より服部のが馴染みやすいぞ」

「じゃあ探偵としてオレは服部に勝ってるな」

田中くんは工藤くんに悪態をついているが実はゼミ生のなかで一番の仲良しだった。

彼が事件に呼ばれてゼミを休んでもきちんと課題やその日の出来事を把握しているのは田中くんが連絡をしているからだ。

「そんなことじゃー彼女できねえぞ」

どき!!

”彼女”って言葉に反応してしまった。

「…よけーなお世話だ」

工藤くんは顔色を変えず答える。

「新一は”彼女には”優しいタイプだもんなー」

声のするほうへと顔を向けるとドアにもたれかかってニヤニヤしている黒羽くんと服部くんの姿があった。

「彼女には優しいタイプ？」

私の横で美緒が興味津々という感じで聞き返した。

「そ。こいつ、他人にほとんど興味ないくせに彼女のことになるとお構い無しやで。周りに見せたことない笑顔向けるしな」

「よけーなことやってんじゃねーよ」

少し顔を赤くした工藤くんは空のお弁当箱を鞆にしまい席を立つ。

「んじゃ、グループワークはそんな感じで。オレも少しまとめてみるから。お疲れさま」

「…彼女には優しいんだって、沙耶」

「からかわないですよ」

私、国本沙耶は東都大学法学部1年生。

工藤新一くんに目下片想い中…

「唯一の救いは、1年生のゼミ分け、基礎教養系は出席番号わけだから工藤くんと一緒だけど…それだけだもんなあ…アドレスすら聞けない」

「入学してから結構経つのにまだ工藤くんと壁あるもんね。でももうすぐ夏休み！！休み中もゼミの集まりあるしチャンスだって！！」

そうか。たしかにそうだ。休み中だって会える。
それにゼミ研究を口実に連絡をとることだって…

よし！！頑張るぞ♪

午後の講義

工藤くんの後ろ姿を眺められる位置に席をとりずっと考えていた。
彼女にしか見せない笑顔、優しさはどう表現されるのだろうか。
優しくされる資格が欲しい。

入学式以来ずっと見つめている

サークルにも入っていない彼はあまり女の子と話す機会もなく、お
そらくゼミ研究と一緒に私や沙耶が一番彼と話す女の子だろう。

彼のプライベートは知らないが学校の中では近い位置にいると思う。

頑張ってその距離を縮めたい…

「新一、今日なんか予定あんのか？」

「いや、特には。」

「今日母さんも青子も遅いらしいんだよ。飯、あやからせて〜」

「お。ええなー、オレも！！」

「ふざけんなっ。自炊しろよ！！」

服部ちゃんと黒羽くん、工藤くんの3人は入学前から友達らしい。とても仲がいい。

容姿も整ってるし3人そろつとより目立つ。

なんだかんだ言いつつ最後は工藤くんがおれて携帯で電話をして

”黒羽と服部と帰るから、突然わりいな”なんて会話をしていた。

電話の相手は誰だろう。

翌日――

工藤ちゃんと服部くんは休みだった。

黒羽くんの説明だと

”新一に來た事件の以来に面白がつて平次もついてった”ってことらしい。

「ゼミ研…工藤くんいないと進まないねえ…」

美緒がポロリと発言。

明後日仮提出なのに殆ど進まなかった。

「……………工藤の家、行ってみねえ？」

「お。いいねえ」

田中ちゃんと木下くんがいたずら顔で提案する。

「どんな生活してるか見たいしね！！いなかったら戻ってくればいいんだし！！」

美緒も行く気満々。

田中くんが以前、米花二丁目だと聞いていたこともあり行ってみることにした。

「……………」

「表札は工藤ってなってるよ……」

「……でか」

大きな洋館はなんの苦労もなく見つかった。

「ここに独り暮らし？どうしよう……家政婦さんとかいたら……」

ドキドキしながらチャイムを押す。

『……はい。』

「あ、工藤くん！！ゼミの田中、木下、木梨、国本です」

『はあ！？なんでオメーら……』

「突然わりいな！！あけてくれー」

田中くんがそういうと”渋々”と玄関があく。

「事件解決したなら学校来いよな。」

「さつき帰ってきたんだよ」

そう言いながら工藤くんはネクタイを緩める。事件にはスーツで向かうんだ、と1つ知れたことに頬がゆるむ。

「しかし独り暮らしなのに綺麗にしてんなあ…俺ワンルームだけど荒れてるぜ」

木下くんが感心して見回す。

「…まあな。」

工藤くんが少し照れたように視線をずらす。

私は少し違和感を感じた

ガチャガチャ――

「新一い。帰ってるの?」

「げっ!!」

「」「」「え?」「」「」

「…ごめん、友だち来てたみたいね…」

可愛らしい女の人リビングに遠慮がちに顔出した。

――だれ?

その後ろから意外な人物。

「なんだ。田中たちじゃん。」

「く…黒羽くん」

「蘭ちゃん、新一のゼミの仲間だよ」

黒羽くんが女の子に説明した。

そうすると彼女は納得したように頷く。

「邪魔してごめんなさい。黒羽くん、奥行こう!」

黒羽くんの背中を押してリビングを過ぎようとした彼女を工藤くんが制した。

「な・ん・で・黒羽がここにいるんだよ。」

「夕飯、3人で食べようと思って。だめ?」

「ダメじゃねーけど…」

「新一は俺を飢え死にさせる気か? ま、オメーは忙しそうだし蘭ちゃん、奢るから外で飯食おうよ」

3人のやり取りに田中くんがつっこむ。

「蘭ちゃん…って言ったっけ? 黒羽の彼女なんか?」

私もそう思ったけど何か違和感…

そしてそれを聞いた工藤くんの顔色が変わる。

「違うよ。蘭ちゃんは新一の彼女」

ニツと黒羽くんが笑う。

かかかか…彼女いたの！？

「あ…毛利蘭です！！」

慌てて頭を下げた蘭ちゃんはとても可愛かった。

リビングで話し合いをしている間、黒羽くんは奥でゲーム。

蘭ちゃんは私たちにお茶を出したり、工藤くんの脱ぎ散らかしたスーツの上着を片付けたりと目まぐるしく動く。

先ほど感じた違和感はこれだった。

綺麗に片付いている室内に対して

スーツはクシャクシャになってソファに置かれているし帰ってきて使ったであろうコーヒーマーカーの周りには粉が落ちていた。

第三者が、工藤くんの後を追うようにして片付けをしてくれていることは容易に想像できた。

「新一、あたしお買い物に行ってくるね」

蘭ちゃんが遠慮がちに声をかける。

「あ…じゃあオレも…」

「だ・め！！ゼミのグループワークなんでしょ？ちゃんと新一も参加して！！」

立ち上がろうとする工藤くんを制してお説教。

そんなことできるのは蘭ちゃんしかいないんだろうなあ…

「お邪魔しましたあ」

「またな、工藤！！」

「黒羽、あんま2人の邪魔すんじゃないぞ」

バタバタと玄関で別れの挨拶をする。

その時、蘭ちゃんが帰ってきた。

「あ、もう帰るの？」

「うん、お邪魔しました」

動揺する気持ちを隠しながら答えた。

「重そうね」

蘭ちゃんの手を見ると沢山の食材。

それを何も言わず工藤くんが奪い取った。

「…だから一緒に行くつつつたのに」

ボソリと呟くそれを私は聞き逃さなかった。

「工藤の彼女、美人だったなあ」

「お似合いつて感じで」

田中くんと木下くんが話していたけれど私はそれを素直に聞き入れることができない。

「沙耶、大丈夫？」

美緒が顔を覗き込んで心配してくれる。

「…ん、平気」

嘘をついた。

平気じゃない。

みんなと別れたあと
呟いてみた。

「……しんいち……か……」

しつくりこないその呼び名。
彼女は自然と呼んでいた。

羨ましいな。
ずるいな。

嫉妬…みつともないけど
それをとめることが私にはできなかった。

2・寂しさと不安

大学に進学してから
なかなか時間が合わなくなった。

少なからず蘭はそう思っていた。

東都大学に進学した新一、快斗、平次。

米花大学に進学した蘭と青子

米花短大に進学した和葉。

それなりにみんな連絡を取っているが

今までそれぞれの幼なじみカップルは学校も登下校も一緒だったことを思い出すと

少し寂しさを感じていたことも事実だ。

「かと言って東都大学になんていく頭ないもん…」

1人で蘭は呟く。

「百面相だー」

後ろから突然声がする。

「え？」

「よ。偶然」

「黒羽くん…」

蘭の隣に駆け寄り一緒に歩く。

「お嬢さん、考えごとですか？」

「そんな大したことじゃないけど…あたしも東都大学に行ければよかったのになあって」

風になびく髪を手でとかしながら蘭は微笑む。

「新一といれなくて寂しいんだ？」

からかい口調で快斗が言うと頬を染めながら少し睨む。

「黒羽くんは寂しくないの？」

「オレは寂しいけど青子がそうでもなさそうで悲しい」

おちゃらけて快斗は言うがきつとみんな寂しいんだと蘭は心でぞっと思う。

でも…新一は？

そんな不安もある。

もしかしたら

大学で可愛い女の子に言い寄られるかも…

幼なじみの自分なんかすぐ飽きちゃうかも…

そんな想いが渦巻く。

「あゝそだ。蘭ちゃん昨日はごちそうさま。ありがとう」

「どういたしまして。今日はお母さんいるの？」

「それが今日から友だちと温泉だとさ」

「じゃあ今日もどう？一緒に夕食飯」

「やったね」

最近蘭は工藤邸で寝泊まりすることも少くない。

夕飯も朝食も新一と一緒にが多い。

もちろん、約束していても事件に呼ばれることもあるがそれ以外はなるべく時間を共有しようとしていた。

「新一い、帰ってるの？」

いつものように合鍵で入る。その様子を「夫婦だなあ」なんて快斗がながめる。

「げ…」

「あ…」

新一の家に大学の友だちがいるのは珍しい。本当に珍しい。

「…蘭。どうした？」

食卓を3人で囲みながら新一が尋ねる。

「え…あ…うつん」

……沈黙

「蘭ちゃん、俺おかわりー」

「あ、はい。新一は？」

「いる」

パタパタとキッチンに移動する蘭を見送ってから快斗は口を開く。

「不安なんじゃねーの？」

「は？」

箸を置いて新一を見据える。

「事件でいないことも多いなか、大学が違っちゃって…寂しいってさっき言ってたぜ」

快斗がそう言うと新一も少し考え込む。

「…………オレだって寂しいよ」

「…のわりには？ゼミ仲間の女の子も家に呼んで楽しそうじゃん」

快斗はわざと蘭に聞こえるように言う。

「んなんじゃねーよ！！勝手に来たんだって！！」

顔色も変えずに否定する新一。

「はーあ。わかってるけどさ…蘭ちゃんに説明してやれよ」

「わかってるって…」

「なにが分かってるって？」

笑顔でお茶碗を新一、快斗に渡す。

「今日…おっちゃんにオレが電話するから泊まってけよ。」

「…え？」

蘭は突然のことに驚いているが嬉しそうに微笑んだ。

「じゃあ邪魔者はさっさと食って帰ろーっと」

食事が終わると快斗は本当にすぐに帰った。

食後のコーヒーを飲みながら2人並んでTVを見る。

その時に何気なく蘭が口を開いた。

「…新一、大学楽しい？」

「へ？突然なんだよ。蘭は楽しくないのか？」

「ん？楽しいよ。青子ちゃんもいるし。授業も楽しいし。」

「じゃあなんだよ。」

新一が怪訝な顔をして尋ねる。

「……今日来た女の子、よく一緒にいるの？」

蘭が視線をそらしながら問う。

その姿に新一は口元がゆるむのを隠しながら蘭をつつく。

「妬いてんだ？」

「妬いてないもん。ただ……」

「ただ？」

立ち上がりコーヒーのお代わりを淹れにいく蘭を目で追いながら新一はカップを空にする。

「…あの子たちはあたしの知らない新一を知ってるんだって…しかも2人とも可愛いし」

少しいじけている彼女を見て「あ…可愛い」なんて思って新一は見つめる。

「オレがオメー以外に興味ねーってまだわかんねえの？」

後ろから抱き締められて思わず少しコーヒーを溢した。

「ちょっと!! 新一危ないよ!!」

付き合い始めてから抱き締められることなんて

何回もあるけど

いまだにドキドキする…。

そんな心地よさを感じながらどこか胸騒ぎがする。

どうか胸騒ぎが気のせいであって欲しい。そんなことを思いながら蘭は新一に身を預けた。

3・視線…？

「別に一緒に出ることないのに」

お弁当を作りながらそんなこと言うがその顔は言葉と裏腹。嬉しうだった。

「いいだろ。」一緒に登校”なんて久々で

「今日は帰りに少し園子たちとお茶する約束してるからまた連絡するね」

「遅くなるようなら迎え行くけど」

新一が真剣な顔して言うがそれが逆に面白かったらしく蘭は声を出して笑う。

「新一はあたしのお父さん？大丈夫よ！！」

ピシッとアイロンのかかった包みにお弁当を入れ新一に手渡す。

「いつもありがとうございます」

「いえいえ。いつもお粗末様です」

穏やかな時間が流れる。

「今夜…ハンバーグがいい」

玄関の鍵を閉めながらそんなことを新一が言う。

「今日はお父さんが家にいるからダメよ」

いたずら顔で蘭に言われた新一は「ちえ」っといじけた。

「だからオレは大学生になったらここで暮らそうって提案したのに……」

「だって仕方ないじゃない。お父さんが結婚もせずに同棲はだめって言うんだもの」

「……まあ。そうだけど」

本気でいじけ始めた新一の右手を握り歩き始める。

「新一、簡単に引き下がったから本気じゃないんだと思った」

「オレはいつだって本気だよ。近々もっかい交渉しに行くから」

その真剣な声に嬉しくなりながら駅へ向かう。

『なーんか…家を出たときから視線を感じるんだよな』

かと言って危害を加えてくる様子もない。

『狙いはオレはか…それとま蘭か…』

ぶつぶつ考えながら2人で改札をくぐると明るい声がする。

「おはよー！！工藤くん、蘭ちゃん！！」

「あ、おはよう。和葉ちゃん」

「はよ。あれ？1人？」

「うん、平次今日はお昼からやてまだ夢んなかや」

3人で電車に乗り蘭と和葉は一駅、新一は二駅乗って降りた。

「あつれー？新一早いじゃん。今日2限からだろ？」

駅から学校へ向かう途中に快斗と偶然出会った。

「蘭が1限からだったから一緒に出たんだよ」

そう言い捨てながらキョロキョロ辺りを見渡し怪しい人物を探す。

「ん？どうした？」

「…朝から視線を感じるんだよな…」

「つけられてんのか？」

快斗も真剣な顔つきになる。

「なんとも言えねえけど。」

そんな2人の空気を壊した人物がいた。

「おはよう、工藤ちゃんと黒羽くん」

「あ…国本」

「おはよう」

さわやかに髪をなびかせながら沙耶は挨拶をした。

「工藤くん、昨日は突然お邪魔してごめんね」

上目遣いで謝罪をする沙耶。

「や…別に」

素っ気ない返事を気に止める様子もなくにつこり笑って校舎へと消えてった。

その姿を快斗は真剣に見つめていた。

「どう思う?」

新一は快斗に問う。

「なに?ズバツと聞くじゃん」

「たぶん…彼女じゃないかとオレは思うんだよな。確信はねーけど」

「めずらしーじゃん。確信もなく疑うなんて。」

「狙いはわかんねーけど…」

「まあ。これは俺の勘だけど…蘭ちゃん、気を付けてやれよ。」

4・なりたい（前書き）

じわじわと彼女が動き出します。

4・なりたい

「はーあ。」

盛大なため息をついて青子は頬杖をついた。

「どしたの？青子ちゃん」

ノートを書きながら心配そうに顔をして覗きこんだ。

「和葉ちゃんと服部くんは一緒に住んでるし、蘭ちゃんは工藤くんと仲良く過ごしてるし…羨ましい」

「黒羽くんと何かあったの？」

「まあ青子が忙しくてなかなか会えてないのもあるけど…ちょっと工藤くんにはキモチ」

ふて腐れて言う青子に蘭は笑う。

「たしかに新一があんなにお友達と時間共有してんのは黒羽くんに出会うまでなかったかも」

その笑顔を見ながら先日の快斗との会話を青子は思い出していた。

梅雨真っ只中のカフェでの出来事だ。

「え？」

「だからモテる男を彼氏にもつと大変だなんて…」

甘い甘いココアを飲みながら快斗は盛大にため息をつく。

「快斗、ナルシストになっちゃったの？それともモテ期？」

「ちげーよ。それに残念ながら似たような顔立ちなのに俺はまったく大学で言い寄るやつはいない」

少しホッとしたのを自覚しながら仲良しの友だちのことを気にかける。

「…言い寄られてるの？」

「ただのゼミの仲間なんだけど熱い視線を送ってるな。蘭ちゃんは大学に遊びに来たりしないから存在もしらないだろうし。」

「ズバッと工藤くん拒否しちゃえばいいのに」

それが出来れば苦労はねーんだが…なんて顔をして腕を組む快斗を見つめた。

「蘭ちゃんのこととは心配だけど…久々に青子に会っても話題は工藤くん。快斗って青子より工藤くんが好きだよなー」

目の前のティーフロートを飲み干してフンツとそっぽを向いた。

「冷たいこと言うなよ！！あの2人不器用で心配になるんだよ。ど
つかの誰かさんたちみたいで。」

「どっかの誰かさん？」

「そ。ここで向き合ってお茶している2人みたいな」

そう言われては聞くしかない。

「…どんな感じなの…？」

快斗から聞いた”ゼミ仲間の熱い視線を送る女”と接触したことを
蘭から聞かされ青子の心臓ははね上がった。

「どんな子なの？」

心配そうに聞くが心臓はバクバク。
一つ気にかかることがあったのだ。

「可愛い子。2人ともあたしとは違うタイプだったわ。
なんか…うまく言えないけど」

「2人とも暗い顔してどないしたん？」

ひよいと和葉が顔を出した。

「和葉ちゃん」

「お昼しよー」

お弁当をつつきながら話の続き。

「でもその子たちゼミの集まりだっただけやろ？工藤くんは蘭ちゃん以外は目に入らなくて！！」

「……うん」

「蘭ちゃん、なにかひっかかりがあるの？」

「…その子たちとは関係ないんだけど…朝、家を出たときから電車を降りる時まで視線を感じたんだよね」

「視線？」

「うん…気のせいかと思ったんだけど、新一もちょっと気にしてたみたいだし…」

それを聞いた青子は少し考え込んだ。

―東都大学―

机の上で携帯が震える。

「工藤くん。なってるよー」

携帯やらノートを出しっぱなしにしたまま机に突っ伏して寝ていた新一の横で沙耶は携帯を手にとった。

「あ…」

ふと見ると

”蘭”の文字と電話番号の表示。

ざっと目を通し新一を揺らす。

「工藤くん！！工藤くん！！」

「ん…なに？」

寝起きの表情にドキッとするのを隠しながら沙耶は新一に携帯を渡す。

「電話、なってたよ」

履歴を確認して少し表情を和らげた新一を見ながら自分の携帯に先ほど暗記した番号を打ち込んだ。

「沙耶！！後ろから見て誰かと思ったよ。めずらしいね、髪を下ろ

してるなんて」

美緒が肩を叩いた。

「あ…気分転換…かな」

「似合ってるけどね」

そう言つて美緒は買つてきたパンを隣に座つてかぶりつく。

「工藤ー！！昨日は悪かつたな、突然！！」

「…ほんとだよ。今度からは連絡入れるよ。」

賑やかに田中たちが近づいてきたが新一は無愛想に答えた。

「しかし…蘭ちゃんだっけ？すげえ可愛いな」

「…気安く呼ぶなよ」

ますます無愛想になる新一にお構い無く田中たちは話しかけた。

「なににに！？工藤つて彼女いんの？」

「しかも可愛いって！！写真とか見せろよ！！」

かつて世間に騒がれた”高校生探偵”、現在はメディアの露出は抑えているが探偵として名の売れている新一に”特定の彼女”がいることに皆興味津々だった。

一部を除いて。

「…残念だったね、沙耶」

「なにが？」

「工藤くん、彼女いたなんて…」

食べていたパンを置いて美緒は新一に目を向けながら沙耶に言葉をかけた。

「沙耶、高校生のときから探偵の彼のファンだったしね。」

「…当時は新聞とかでしか顔知らなかったけどね。大学で見えます好きになっちゃったもん」

うつとりと沙耶も新一を見る。

「蘭ちゃん…羨ましいな」

「え……………」

思わず美緒は沙耶を見た。

「あたし、蘭ちゃんになりたい」

その目は真剣だった。

「沙耶…？」

「あたし今まで手に入れられなかったもの、ないもん
真剣な目に

美緒はなにも言えなかった。

5・接触

「黒髪でー、細くて色白でー…ああ言うのが好みなんだな、土藤は」
しみじみと田中が言う。

「うわあ、会ってみてえ」

周りの男子が盛り上がった。

「うっせー。言ってる」

新一は周りをジロリと見て席を立ち、携帯で電話をかけ始めた。

おそらく、愛しの彼女に…

あんなに優しい顔をしてかけるのか…と沙耶はじつと目で追った。

「あ…蘭？どうした？」

『あ…ごめんなさい。突然なんだけど…』

「…え？まじ？」

微かに嬉しそうな顔をしたのを沙耶は見逃さなかった。

やだ…自分でも今、自分が嫌なやつだってわかる…

そう沙耶は思いながらも

自分の茶色い髪をつまんで見つめた。

「くっどー！！何しとんや？飯にしようや」

「なあにニヤけた顔してんだよ」

賑やかに快斗と平次がやって来た。

「…………オメーら聞いたか？」

「「ああ？」」

「買い物終わったら蘭たち3人でここに寄るって」

「何でや」

「また急な話だな」

3人は急にソワソワし始めた。

彼女たちが大学に現れたことは今までにないのだ。

まあもちろん
彼らの

”独占欲”で学校の——自分たちの周りの男子に彼女を見せたくない気持ちももちろんあつてのことだが…

「工藤くん、びっくりしてた？」

「うん、でも行っていていいみたい」

電話をきつて蘭が微笑む。

「久々に6人でお茶できるね！！楽しみ〜」

「ゼミのその子見れるんかなあ。ちょい気になるなあ」

和葉は純粹にそう言ったがただ1人、青子はまた難しい顔で卵焼きをつついていた。

それはまた、同時刻に快斗も沙耶を見つめて同じ行動をしていた。

「国本さんってどこの高校出身だっけ？」

「西高だけど…どうして？」

あまり沙耶に話しかけることのない快斗が声をかけたので周りはみんな驚いていた。

「西高かー…」

「どうした？黒羽…なんや難しい顔で」

ヒソヒソと隣で平次が聞く。

「いや、ちよつとな」

「だいぶ予定時刻過ぎたけど…いる？」

「いや…おらんね」

買い物を終えた女性陣はたくさんのショッピング袋を下げて東都大内をウロウロしていた。

「よく研究室にいたのか言ってたけど…電話してみようかな」

蘭が歩きながら携帯を取り出した。

「あ…蘭ちゃん前…!!」

ドンッ

青子の声も遅く思いつきり人にぶつかった。

「ご…ごめんなさい！…あ
「あ…こんにちは」

ぶつかった相手は沙耶だった。

「買い物帰りに寄ったんですか？」

ぶつかった拍子にぶちまけた真新しい洋服たちを広いながら沙耶は微妙な笑みを向けた。

「蘭ちゃん大丈夫？」

「洋服、ビニールかかっててよかったなあ」

全てを拾い終えて沙耶が手渡した。

「工藤くん、学生ラウンジにいましたよ。それじゃ」

立ち去る沙耶に慌てて頭を下げた。

「ありがとうございました」

「知り合いなん？」

「あ、今のがその…ゼミの」
「蘭！…！」

上から声がして3人は見上げた。

すると2階の窓から快斗、新一、平次が顔を出していた。

「工藤くん。青子たちもいるんだけどなー」

「あ、わりい」

少しいたずらな顔をして新一は笑う。

「今そつちいくから待ってて」

快斗の声かけで男性3人は窓を閉めて支度を始めた。

大学で6人で集まるなんてはじめてだ。

校外で待ち合わせをすることがあっても学内に入ることなんてないのだ。

「…なんか、よう見ると荷物多いな」

和葉たちを見て平次は心底驚いた、という顔をした。

「ええやん。これを最後に夏のセールまでは買物我慢するんやから」

そんなやり取りを見ながら新一は然り気無く蘭の荷物を奪い取るように持つ。

「あ…ありがとう」

「工藤くん紳士、やっぱこういつとこで差が出るんだよ、快斗と工藤くん」

「え？じゃあなにか？俺が新一に劣ると。」

「勝ってると思ってたの？」

後ろのそんなやり取りはお構い無く。

新一は蘭の荷物に目をやり疑問をぶつけた。

「なんか砂ぼこりやら葉っぱが袋に入ってるのはなんでだ？」

「あ…さっき人とぶつかって荷物ぶちまけちゃったんだ」

「なあにやってんだよ。気を付けろよ」

袋についた砂を手で払いそんな注意をとばす。

「ぶつかった人、新一の家に来た女の人だったよ」

蘭の純粹な笑顔に新一は真剣な顔で見つめ返す。

「長い茶色い髪の人？背の低めの…」

新一の言葉に”そうそう”なんて軽い感じに返答をした。

「ふーん、そっか」

なにともなかったように

新一は左手でくしゃつと蘭頭を撫でた。

「うれしいなあ、6人でお茶なんて久々だし、いわゆるトリプルデートだよー！」

青子は注文したパフェを頬張りながら嬉しさを全身で表現した。

「またしばらく集まれそうにないもんなあ。青子ちゃんと蘭ちゃん、忙しくなるやろ？」

聞き捨てならなかった。

”忙しくなる？”

もうすぐテストがやってきて、その後は楽しい夏休みのはずなのに。

「そうなんだよねー…テスト前にテスト対策合宿とか言って学校泊まり込みの二泊三日…」

蘭はカフェオレを啜りながらさりとて言う。

「まじ？聞いてねえけど…」

「だって今日発表されたんだもん。あたしも青子ちゃんもびっくりだよ…まさか学校に泊まり込みなんて」

「全然外出らんねえの？」

「コンビニに行くくらいはできるけど基本的には外出だめみたい…」

「ふーん…」

拗ねたように珈琲を流し込む。

「あーあ。工藤めっちゃ拗ねとる」

「本当に蘭ちゃんいないとダメだよなあ」

「うつせーよ…っつーか強制なのか？それ」

「うん…だって単位に関係あるんだもん」

「残念やなあ　↑藤も黒羽も。黒羽はまあ実家やから平気やろ。工藤は飯　どないするん？」

「オレだって作れねえことねーよ。いざとなったら」…」

「コンビ二弁当はだめよ！！」

すかさず蘭の注意がとび
一同は笑いにつつまれた。

「なあ　ところでさ。女性陣の学校に西高出身の子っている？」

「西高かぁ…」

「周りにはおらんなあ」

「もしいたら教えてくれる？」

口元に笑みを浮かべながら快斗は甘い珈琲を飲んだ。

6・動き出す

「少し寄ってけよ」

ほぼ強制的にともとれるその誘いに”もー”なんて答えながら嬉しそうに鍵が空くのを新一の隣で待っていた。

ふと蘭がポストを見るとなにかが入っていた。

「？」

分厚い封筒が投函されていた。

宛名も差出人もない。

「新一、これ……」

「んー？」

封がされていなかったため蘭が新一に差し出したとき中身が滑り落ちた。

謝罪の言葉を述べながら慌ててかき集めていた蘭の手が止まる

「……これ……」

「すげえな」

高校生探偵として新聞に載ったときの写真のコピーや最近の新一の

日常をおさめた写真が大量に入っていた。

「…いつ撮られたの？」

「さあ？」

「さあつて…探偵でしょ？尾行されたり写真撮られたり気づかなかったの？」

半ば呆れながらも新一に危険が迫っているのではないかと蘭は心配そうに新一をみる。

「とりあえず珈琲が飲みたいなあ」

わざと蘭に甘えキッチンへ促す。

珈琲を淹れている姿を確認し、1人で封筒の中の写真を一枚残らずチェック。

殆どが隠し撮りの写真で新一が中心となったものであったがただ1枚、他と違った写真があった。

おそらく朝の視線の正体はこれの送り主。

朝、新一と蘭が家から出る瞬間を撮ったものが入っていた。
蘭の顔をマジックで黒く塗りつぶしたものが――。

自分の心臓の音が早いのを自覚しつつ平静を装う。
蘭に無駄な心配をかけたくない。

「新一ー！！珈琲はいったよー」

ひょいとリビングに顔を出した蘭を思わず新一は抱き締めた。

「なに？どうしたの？」

「…充電中。」

ぎゅっと腕に力を入れ心のなかで誓いをたてる。

——蘭を守るのはオレだ…

「沙耶、なに考えてんの？」

美緒は沙耶の買い物に付き合いながら親友の頭のなかを覗こうとしていた。

「なにつて？」

「一応聞くけど…朝、どうしてあんなに早かったの？どこ寄ってたの？」

目当ての服を探しながら美緒ににっこりと笑顔を向ける。

「ね、覚えてる？高3のときの文化祭。」

「え？うん…」

「ミスコンであたしが1位で美緒が2位。」

「今思いっきり順位を強調した？」

むくれて美緒が沙耶を睨んだ。

「あたし、容姿には自信があるの。東都大学に入れるくらいの頭もあるし」

目当てのものを見つけたらしく鏡の前で自分にあててチェック。

「蘭さんに負けてないと思うんだよね、工藤くん…新一…くんへの想いの強さも」

「あのね、沙耶。たとえそうでも、工藤くんは蘭さんが好きなの。好みの問題だってあるだろうし、何かが力チッと工藤くんに合うんじゃない？」

一生懸命に美緒が沙耶に訴えるがとまらない。

「わかってる。だから、あたしが彼の好みに合わせる。」

手にとったワンピースをお会計し、満足げに袋を抱き締める。

「…呆れた」

美緒はため息をついてウキウキしている沙耶を眺めた。

…

「で？」

「でつて…俺に何を求めてるんだよ、名探偵さん」

翌朝、ラウンジで缶珈琲を飲みながら快斗と新一はヒソヒソと話合っていた。

「国本に出身校を聞いて、なにかを調べようとしてんのはわかってんだよ。で？成果は？」

「あのなあ…昨日の今日で何か分かると思うか？」

「捜査は足で！！オメー変装でも何でもして早急に調べるよ」

新一は珈琲の残りを飲み干しちらりと周囲を確認した。

「イラついてんな。なんかあったのか？」

神妙な顔つきで快斗は尋ねた。

周りに人がいないのを確認し、昨日投函されていた封筒を快斗に差し出す。

「うわ…悪趣味だなあ」

パラパラと写真を眺め顔をしかめた。

「なにを感じる？」

「そりゃあ”いつでもあなたを見えています”かな」

腕を組み体を仰け反らして新一はうなづく。

「なんもしてこねーなら放っておくんだけどよ。蘭が心配だ」

「同感。」

「犯人は絞れてるんだが…下手に動いて刺激すのがなあ」

そうなんだよなあと快斗はうなづく。

犯人——国本沙耶が熱い視線を送っていたことは快斗も平次ももちろん新一も気づいていた。
ただ、下手に拒否をして逆上されたら…と考えると何もできず蘭の存在を気づかせるようなことはしていなかった。

が、いつまでもそれでは
期待をさせても…と少しずつ”彼女がいます”ということを醸し出す予定であった。

しかし

予定よりも早く蘭と彼女は接触してしまったのだ。

「工藤！！黒羽！！」

「おー平次。そんな慌ててどうした？」

「彼女、まじやぞ…」

3人で頭を並べて窓から下を見る。

「…どっかで見たような服だねー」

おちゃらけて快斗は言っが目は笑っていなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4171z/>

彼の特別

2011年12月20日16時54分発行